

2026年6月10日号

NO 1 号



じんけんにゃんだふる

じんけんを「他人ごと」から「自分ごと」へ

OYAOYA 通信



学びのホームグラウンド じんけん楽習



6月10日のじんけん楽習塾は「多民族共生社会のためにーワークで考えるレイシャルハラスメント／マイクロアグレッション」がテーマです。講師は文 公輝さん（NPO 法人多民族共生人権教育センター事務局長）です。

NPO法人多民族共生人権教育センター 理事・事務局長。1968年生まれ。韓国籍の在日コリアン3世。「人種差別をなくす大阪ネットワーク」、「いますぐなくそう！レイシャルハラスメントネットワーク」の事務局長を務める。『歴史展示のメッセージ』（2005年、アムプロモーション）、『被差別マイノリティのいま』（2017年、部落解放・人権研究所）、『外国人の子ども白書』（2017年、明石書店）など（いずれも共著）。

みんなのふりかえり 1回目 5/27

人権教育の今日的課題 ～個別的人権課題に挑む多様性教育～

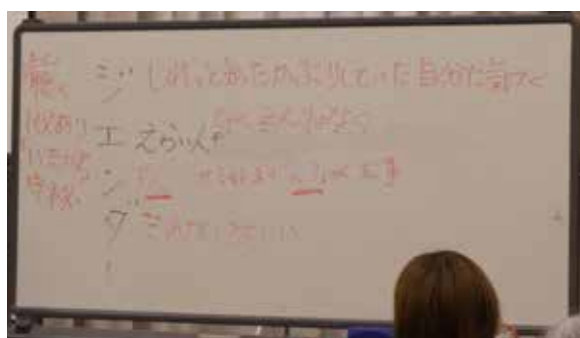


森実さん（大阪多様性教育ネットワーク）

毎年恒例、楽習塾のルール作りから今年度もじんけん楽習塾がはじまりました。

いつもは、「じんけん」を頭文字にルールを決めますが、今年は「ジェンダー」の頭文字を使って、ルール作りをしました。

- ジ 「しれっと知ったかぶりしていた自分に気づく」
- エ 「えらい人なく 遠慮なく」
- ン 「ん？から始まり、ん？が大事」
- ダ 「だれがしてもいい」



今年のじんけん楽習塾のルール

ルール作りを終えた後は、70年前の八尾市内の学校での出来事を題材にした教材を使って、グループ内でこの話の「評価できる点」「評価できない点」について話し合いました。

今回の参加者のほとんどがじんけん楽習塾を毎年受講している市民のみなさんでしたので、特に、「評価できない点」を話し合う際には、女性や、こどもの権利、プライバシーなど、あらゆる視点から指摘されていて、とてもすばらしい時間になりました。



< 参加者の感想&ふりかえり >

●時代背景も気になりながら、学びになりました。女性の偏った役割はほんとひどいなあと思いました。いいことと問題点はちがう方向から見たら、全くちがうことになるのも大事なことと思えました。

●今回のテキストの内容は初めて知りました。70 年前の時代と今の考え方は違っているとは思いますが、現状をあきらめるのではなく、変えようと考え行動したことは素晴らしいと思います。やり方がどうだったかはわかりませんが。

●初めての参加で頼りっぱなしでしたが楽しかったです。

●自分の心を見つめ直したいせつな時間になりました。最後の「人のために何かをしよう」という女の子の話はとても深くて、身につまされる思いです。今後の宿題にします。

●水野さんを守ろうについて、たくさん考えることができました。代書屋さんのことも知りませんでしたし、クラスのことだけでなく社会背景もひっくるめて考えることで気づきがたくさんありました。ありがとうございました。

●今回の教材では、部落の子が学校に行けず、働かされていることにだけ焦点が当てられていて、なぜ、女の子だったのか。という視点が欠けていた。どのグループも、そのジェンダー格差を指摘していたことがよかった。部落フェミニズムが、去年刊行されたことの意義を改めて感じた。遅すぎるけれど、今からでも、部落差別を語る時、女性の場合に受けた抑圧は一般的な部落差別を語る時に取りこぼされてしまうこ



とを忘れたくない。

●昔は、「アウティング」などの言葉や定義や、その問題性などが浸透していなさそうで大変だったなと思った。

●今回の教材で、結局、「クラスの絆」や、「家族を支える女の子」のような、感動ストーリーに若干仕上がっているのが一番気持ち悪かった。マイノリティは、マジョリティにとっての感動装置じゃない。勝手に人の人生をポルノ化するな！と思った。いい話にまとめようとしていることを批判していた参加者もいてよかった。同情買わずとも、誰かの人権侵害に怒れる社会になって欲しい。



連絡

毎回ふりかえり用紙をくばります。オンラインの場合はファイルを送ります。

後でメールまたは、ファックスでもいいので送ってください。お願いします。通信に反映させたいと思います。(公開だめなものはオープンにしません)

写真を撮影しますが、OYAOYA通信、八尾市人権協会のホームページなどで使用場合があります。なるべく個人が特定しにくいものと考えていますが、困るという方は事務局に申しつけてください。

